

伊那路 五十年九月号(通刊二三四号) 抜刷

月見松遺跡緊急発掘調査報告

伊那市教育委員会

月見松遺跡緊急発掘調査報告

伊那市教育委員会

一、はじめに

月見松遺跡が全国的に脚光を浴びるようになったのは昭和43年3月緊急発掘調査が実施された以後である。調査の成果は報告書によると次のようになっている。(註一)

- 1、河岸段丘に形成された縄文中期初頭から将来に至る集落址と平安時代集落址の複合遺跡
- 2、面積約15haに達する大遺跡
- 3、縄文中期堅穴住居址 54個、特殊遺構 5個、平安時代堅穴住居址 4個

本回の発掘調査が実施された契機は、遺跡地南端段丘突端面に山岸、河野両家の共同墓地が造成されるにあたり、破壊寸前に直面しているという申し出が地主の下小沢在住山岸七衛氏より伊那市教育委員会へ提出された。そこで、市教育委員会では昭和48年11月6日午後、小池政美、友野良一両氏を現地派遣し、山岸七衛氏と現地協議を行ない、できるだけ破壊されないような姿で造成してもらいように依頼した。その内容は次の通りである。土壘は現状のまま

で埋土すること。ところどころに点在している7本の石碑は拓本を取って記録保存をし、現物は共同墓地完成の時に一緒にして祀ってもらうこと。経塚は石垣をつくる際に東半分が切られるから発掘調査をして記録保存すること。以上、前述した諸要求を顧みて、発掘調査日を昭和48年11月14日～11月15日と決める。

最後に、発掘作業に奉仕をいただいた方々の名前を記して、御礼に代えさせていただきたい。

山岸ちよ、山岸千世子、山岸茂子、河野やすみ、河野春子、山岸七衛、山岸源衛門、河野通博、山岸寿一、山岸武雄、伊那北高等学校歴史研究部(木下久、荻原茂)

二、位 置

今回、発掘を実施した月見松遺跡は昭和43年度、伊那市教育委員会より刊行された報告書で述べられた一帯である。

地籍は長野県伊那市大字伊那下小沢八〇八五番地である。下小沢部落の北側、段丘突端面に位置し、農道と墓地によって区画されている。発掘地は原野となっており、雑草が林の如くに林立してい

た。
 地形・地質の項、歴史的環境の項については以前、調査された報告書の中に詳細に述べられているので、本回は省略させてもらうことにしておく。



【写真1】月見松遺跡の近くにある
 普光庵松月寺本尊

三、発掘経過及び発掘日誌

(昭和48年)

11月10日 雨の為に午前中作業中止、午後測量器材並びに発掘器材の運搬をする。

11月11日 石碑の拓本取りを実施する。

11月12日 遺跡地の全体測量、土壘実測、経塚実測

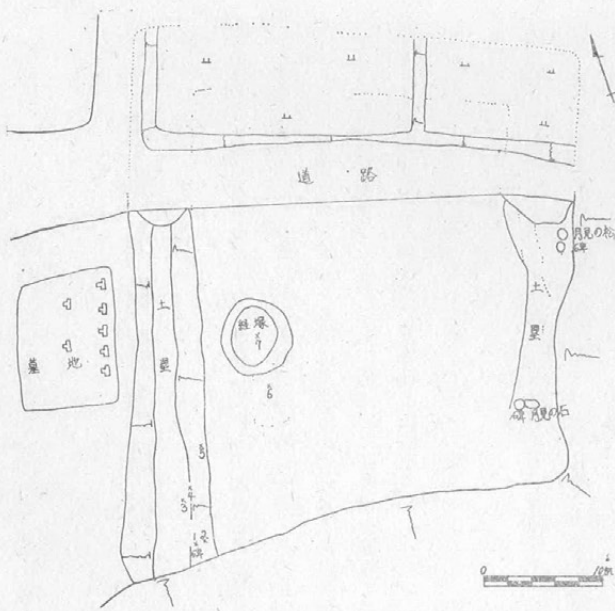
11月14日、11月15日

山岸家、河野家一族の献身的な奉仕により、経塚東半分の発掘調査を実施する。

四、石碑と遺構

石碑は7本現存し、いずれも供養塔であった。石碑の分布状態は第1図にその番号を記してあるので、それに照合してみたい。よくわかるように右側に写真を、左側にその銘文を記し、その他、諸項目について書きしるしておく。土壘遺構や経塚遺構については一般的な説明をしておくことにする。

(1) 供養塔



【第1図】遺構及び石碑分布図

高 48cm
 上幅 26cm
 下幅 26cm
 最大厚(中央) 10cm

石質 黒雲母花崗岩
 台座 ナシ

□□□ 一千部
 三部妙典
 □□□ 二月十七日



【写真2】 供養塔 1

高 48.5cm
 上幅 21cm
 下幅 21cm
 最大厚(中央) 10cm
 石質 雲黒母花崗岩
 光背 舟形
 台座 自然石を利用した粘板岩

宝永三年戌年□月部
 正月三日
 奉読誦阿弥陀経
 為普光院禪妙尼



【写真3】 供養塔 2

高 61cm
 上幅 27cm
 下幅 27cm
 最大厚(中央) 11cm
 石質 安山岩
 光背 舟形
 台座あり
 安山岩ではめこみ式
 になっている。

宝永三年戊午五月一千部
 奉供養大乘三部妙典
 為松林院禪淨慶菩提



【写真4】 供養塔 3

高 76cm
 上幅 30cm
 下幅 29cm
 最大厚(中央) 13cm
 石質 黒雲母花崗岩
 光背 舟形
 台座 ナシ

享保十九天□□
 西国秩父坂東□□百番
 八月□日



【写真5】 供養塔 4

高さ 67cm
 上幅 27cm
 下幅 27cm
 最大厚(中央) 16cm
 石質 黒雲母花崗岩
 光背 舟形
 台座 ナシ

□合二現菩提
 三部妙典一千部塔
 寛保十四年八月



【写真6】 供養塔 5

高さ 60cm
 上幅 33cm
 下幅 35cm
 最大厚(中央) 20cm
 石質 粘板岩
 台座 ナシ

(右側面)
 奉読誦仏乘三部妙典一千部
 (左側面) 願主 専修行者高野氏
 宝曆四 戌甲
 二月



【写真7】 供養塔 6



【写真8】 供養塔 7

高さ	66cm
上幅	15cm
下幅	24cm
最大厚(中央)	14cm
石質	粘板岩
台座	ナシ

(裏側)
三月朔日
宝曆八戌寅天
願主 真信
阿弥陀経三千卷

(四) 土壘遺構

今回の調査区域内に含まれている土壘に関係した事柄についての古文獻を引用してみると、次のように記載されている。これは「長野県町村誌」南信篇によるものである。

『小沢耕地東北隅、即ち中野原の南端にあり。東北西の三面壘を繞らし、南面小沢洞に臨めり。天正の頃、山口權左衛門居住す。伊那武鑑根元記に見へたり。土人偶々土を鑿て古瓦、古戦具等を得。又天矯たる古松の一株を存し、往昔より稱して月見松の名あり。下に満月影の形顯れたる大岩、昔母班茂したるものを月岩と呼ぶあり。又和歌を刻したる大碑を坐せり。風景最佳絶の一勝地なり。』

構築当時は土壘が南岸の段丘崖を取り囲むようになってあったと思われるが、現在は東西に走る道路より北側は水田となつてしまつて、往昔の姿をみることはできない。

山岸七衛氏の談話によれば、北側の土壘は終戦直後に破壊されたということだった。

同氏の話を参考にして土壘に囲まれたいわゆる城郭遺構の規模は推定南北40m前後、東西38m程と考えられよう。ついで記しておきたいことは、北側の土壘は以前月見松遺跡を発掘調査したときに土壘に関係する溝の跡が発見されたと、当時発掘担当の林茂樹氏の談である。

調査以前まで現存していたのは西側と東側のものであり、前者は



【写真9】 土 壘 全 景

しろ、その上にある月見の松、碑、月見の石の方が歴史的にみるべき価値が多いように思われる。

右側の土壘は南北31m、下底の最も幅の広いところで7m50cm、せまいところで5m、上底幅は1m20cm〜1m80cm位、高さは1m前後をそれぞれ測定できた。

断面はカットをしてみないので確実な点は言い難いが丸味があった台形状を呈しているものと思われる。

今回の共同墓地造成によって、破壊されずにそのままの状態で見られる。

今日、眼に触れられるのは東側だけである。これは全般的にくずれてしまっていて、土壘としてはあまりみごたえがないように思われる。む

(ハ) 経塚 遺構

共同墓地造成地区内に盛土状の遺構が以前から知られていた。これは長野県遺跡台帳では月見松古墳群の一つとして登録されていたが、今回の調査で、古墳ではなくて経塚と判明した。規模は南北6m50cm、東西6m10cmで、墳高は西側で50cm、東側では05cm程を測定でき、墳高のレベルは同心円状に展開していた。都合により東半分だけを発掘調査してみると、土層の内容について次のことが明らかとなった。耕土が30cm位あり、その下に黒色土を65cm位盛り上げた



【写真10】 経塚 全 景

たような形になっていた。黒色土層中より鉄釉の陶器片が一片だけ出土した。構築年代は供養塔7の銘文の年代と同じであると決めつけてもよいのではないか。

五、ま と め

共同墓地造成ということで三〇〇㎡のせまい範囲に限られた調査であった。一般的に月見松遺跡と言うと縄文中期時代の大集落が想像されるが、今日は、むしろ中世あるいは近世の構築物または碑が主体となっていた。

これらの構築物は、普光庵松月寺と密接な関係があったと思われる。当寺は小沢川の左岸段丘中腹にあり、尼寺であったが、現在は無仏となつてしまった。七本の石碑はいずれも供養塔であり、当寺と関係があることは、きわめて濃厚とみてよからう。

土壘遺構は現存保存という措置をとつたために、その規模や高さを実測しただけに留めてしまったが、カットしてみれば、当然のことと思われるが、版築の構造を形成しているものと推定できよう。

経塚遺構は宗教上の構築物であることは疑う余地は全くない。東側の調査だけとなったが、経塚につきものである経石の出土は全くなかったが、鉄釉陶器片の出土や墳頂の供養塔の銘文より江戸時代中期頃の所産物であることは相違ないと思われる。遺物の出土量の少ないことからして、信仰対象期間が短かったり、あるいは信仰状態が稀薄であつたと思われる。

最後に近世に於いて、文献上に残されていない貴重な資料を各種の方法で今後調査を積み重ねていきたいものである。

